



能登半島地震について①

～2024.1.1 地震発生～

2024年1月1日に発生した能登半島地震では震度7を記録し、広域に甚大な被害をもたらしました。私は「復元納棺師」として活動しており、同時に全国各地で発生している災害時に設営される警察管轄の災害遺体安置所支援にも出向いています。約20年、セミナー講師をつとめた経験から、職種を問わず全国各地に教え子が多くいます。



報道で知る地震の被害を見た時、私自身が東日本大震災で震度6を経験していたことで、これから明らかになる被害の全容を知るたびに向き合う覚悟、そして現地では何度も発生するであろう余震が続き、大きな地震の度に歩くことさえ出来ない揺れと戦っているのではないだろうか。道路や家屋の倒壊による負傷者も多いのかもしれない。行方不明者の数が増えていくことへ心配と不安を募らせる中で、石川県の教え子の方々に連絡を取ろうと考えていました。まずは自分の気持ちを落ち着かせよう。そう思い、神社へ向かいました。

私はむかし、正規の巫女として奉職していたことがあり、宮内庁から来社する先生の指導を受け、舞楽や雅楽を神前で奉納していました。日本神道では八百万(やおよろず)の神が居て、祈願(お願い)の内容により神を選び決めることがあります。1月6日のお昼、地元にある白山神社に参拝しました。白山神社の総本宮(本山)は、能登半島地震が発生した石川県にある白山を御神体とする白山比咩(しらやまひめ)神社です。正式な作法で参拝し、最後に祭神である菊理姫神(くくりひめ)にお話ししました。「私で何かお役に立てることがございましたら、現地とおつなぎいただけたらと存じます。その時は心を込めて、尽くさせていただきます。」深く一礼をして車に戻った時、電話が鳴りました。石川県の教え子からでした。「笹原先生、助けて下さい。こちらに来ませんか?」参拝を終えて8分しか経っていません。神様とは、時にとても速いお働きをされるものだなと、この時もまた思いました。菊理姫神は、人と人をつなぐコーディネーターがとても得意です。それは一般的に、ご利益と呼ばれることもあります。



私はむかし、正規の巫女として奉職していたことがあり、宮内庁から来社する先生の指導を受け、舞楽や雅楽を神前で奉納していました。日本神道では八百万(やおよろず)の神が居て、祈願(お願い)の内容により神を選び決めることがあります。1月6日のお昼、地元にある白山神社に参拝しました。白山神社の総本宮(本山)は、能登半島地震が発生した石川県にある白山を御神体とする白山比咩(しらやまひめ)神社です。正式な作法で参拝し、最後に祭神である菊理姫神(くくりひめ)にお話ししました。「私で何かお役に立てることがございましたら、現地とおつなぎいただけたらと存じます。その時は心を込めて、尽くさせていただきます。」深く一礼をして車に戻った時、電話が鳴りました。石川県の教え子からでした。「笹原先生、助けて下さい。こちらに来ませんか?」参拝を終えて8分しか経っていません。神様とは、時にとても速いお働きをされるものだなと、この時もまた思いました。菊理姫神は、人と人をつなぐコーディネーターがとても得意です。それは一般的に、ご利益と呼ばれることもあります。

～災害遺体安置所支援チーム Genies～

私は本来の仕事とのつながりの中で、災害遺体安置所支援チームを持っています。チーム名はGenies(Grief care for each person, No limits in any Emergency)『どんな緊急現場でもそれぞれの方に、それぞれのグリーフケアを』の頭文字から取った造語であり、これからの時代を担うメンバーの若い医師たちが名付けました。

メンバーには医師、歯科医師、元消防士、救命士、元自衛官、元県庁防災室室長、復元納棺師、葬儀担当者など東日本大震災時にそれぞれが活動し、最終した災害遺体対応のスペシャリストの約20名で構成されています。支援が長期に渡る場合、それぞれの分野の登録サブメンバーから選ばれた人員でいくつものチームが構成され、現在は任意団体として活動しています。主に全国自治体の災害時安置所ガイドラインのアドバイザーや、安置所に関わる訓練指導、講習などを行っています。

元消防士である隊長からの連絡を受け、能登半島に出動するメンバーの決定と出動準備完了の連絡が入り、この時ヒュー・メックス様より「セーフティセットを200本」、「シオンを200個」ご支援いただきました。

石川県庁から災害支援依頼書と車両に付けるカードを受け取り、珠洲市、輪島市と警察管轄災害遺体安置所にて約2日間で28名の方の復元納棺ボランティアを終えて来ました。



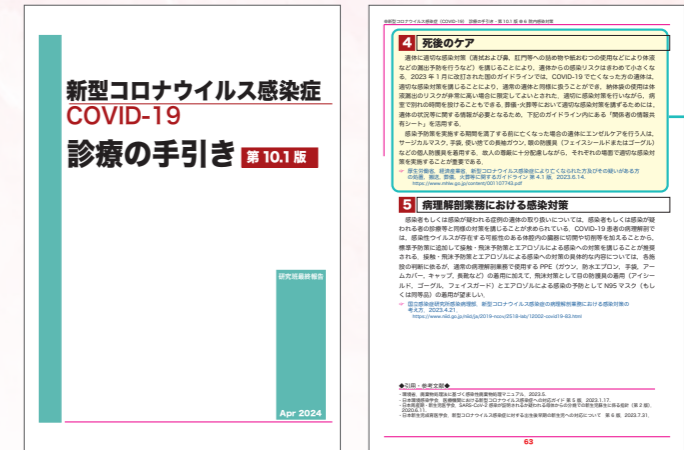
復元納棺師 笹原 留似子



新型コロナウイルス感染症に関する情報



新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き【第10.1版】より (2024年4月版)



▲表紙

▲63ページ

4 死後のケア

遺体に適切な感染対策(清拭および鼻、肛門等への詰め物や紙おむつの使用などにより体液などの漏出予防を行うなど)を講じることにより、遺体からの感染リスクはきわめて小さくなる。2023年1月に改訂された国のガイドラインでは、COVID-19で亡くなった方の遺体は、適切な感染対策を講じることにより、通常の遺体と同様に扱うことができ、納体袋の使用は体液漏出のリスクが非常に高い場合に限定してよいとされた。適切に感染対策を行いながら、病室で別れの時間を設けることもできる。葬儀・火葬等において適切な感染対策を講ずるためには、遺体の状況等に関する情報が必要となるため、下記のガイドライン内にある「関係者の情報共有シート」を活用する。

感染予防策を実施する期間を満了する前に亡くなった場合の遺体にエンゼルケアを行う人は、サージカルマスク、手袋、使い捨ての長袖ガウン、目の防護具(フェイスシールドまたはゴーグル)などの个人防护具を着用する。故人の尊厳に十分配慮しながら、それぞれの場面で適切な感染対策を実施することが重要である。

厚生労働省、経済産業省、新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方及びその疑いがある方の処置、搬送、葬儀、火葬等に関するガイドライン 第4.1版 2023.6.14. <https://www.mhlw.go.jp/content/001107743.pdf>

▲63ページ抜粋

ヒュー・メックス工場通信

新工場の竣工式を行いました

株式会社ヒュー・メックスは2024年6月24日、新工場の竣工式を執り行いました。工事に携わって頂いた皆様、施工中何かとご迷惑をおかけしたご近所の皆様、そしてヒュー・メックスをずっと支え応援して下さった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。今日を新たな出発点とし、なお一層の努力を重ね業務に励んで参ります。今後ともこれまでと変わらぬご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。



発行・企画・編集

株式会社ヒュー・メックス

〒733-0012 広島市西区中広町三丁目 3-21

TEL 082-532-0361 FAX 082-295-6284 URL <https://www.hum.co.jp/>

ホームページは右記のQRコードを読み込んでください



能登半島地震について②

エンゼルケアの現場から

通常病院で行うエンゼルケア時には、セーフティシート1箱、シオン1個で充分、故人の体を火葬まで守ることが出来ます。セーフティシートは死後、出来るだけ早く使用できることで「死臭」「出血」「浸出液」を遺族が目当たりにするリスクを抑えることが出来ます。弊社の納棺でも、故人お一人に1本必ず使用しています。

弊社で行う警察経由の復元納棺の場合には、セーフティを3本〜5本使用することがあります。能登半島地震災害遺体安置所支援では、お一人に3本〜10本使用しました。直下型の被害を受けたお体を元に戻すためには、セーフティの本数が必要でした。能登半島地震でも火葬場の状況に合わせ、ご遺体を1ヶ月以上安置する必要がありました。

警察管轄の安置所では、警察官の要望で



遺体は、一人一人の状態に合わせた処置、復元、保全、安置が必要になります。エンパーミングをしなくても、処置復元を正しく行い、保全安置を行うことで遺体は長期間安定させて持たせることが出来ます。弊社では多忙の方々のために、リモート講習で遺体保全管理の知

菊理姫神のご利益

文章の最後になりますが、先に記載した「菊理姫神」の知られざるお話しをして終わりにしたいと思えます。葬儀には「菊」を使うことが多くあります。昔から虫を寄せ付けないなど言われています。菊は皇室でも使用される菊花紋章でも知られています。実は菊理姫神のご利益はもう一つあり、あの世この世を取り持つ縁を持っています。大切な人をお空に送った時、「夢で良いから会いたい」と誰もが思う時、寝る前に菊を一輪飾って、「菊理姫神、〇〇さんと会いたいです。」と言って3回拍手を打って寝ると、夢で逢えると言われています。葬儀で菊が使われるのは、民俗学的に菊理姫神のお力をただけですようにという願いを込めたものという説もあります。夢で逢えたら、菊理姫神へお礼を伝えるのを忘れないようにしてください。

避難訓練と災害訓練

避難訓練は無事に安全な場所へ逃げる訓練。災害訓練は、支援する人たちが緊急事態にどう備え、活動するのかの訓練です。私たちは普段から、どちらの訓練も行わなければなりません。我々もこれからも研鑽して参りたいと思えます。皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。



安置所支援を終えて

能登半島地震安置所支援を終えて、私たちチームのメンバーは真直ぐ白山比咩神社へお礼参りに参拝しました。本殿に向かう途中、それまで降っていた強い雨が止み、ご神体の白山には大きな虹がかかっています。大自然の一部であるという謙虚さを忘れないように、改めて自然と共に生きること考えさせていただいた時間でした。能登半島地震を含め、災害に見舞われた多くの皆様にお見舞いを申し上げます。お空に旅立たれた皆様にお悔やみ申し上げます。



笹原留似子の思い出日記

第5話

日本の風習を読み解く 「妊婦が死者に」 触れてはいけない」説

全国各地にまだまだ残る風習は、真の意味を知らずに形だけにこだわると現代では時に遺族の心を傷付けることがある。私は納棺という死者と生者のお別れの現場に立ち、火葬までの体がある限られた最期の時間の中で、遺族の悲しみを前に「風習」の壁に当たることがある。「なぜ、そう言われているのか。」「根拠は何か。」「その目的は何か。」「遺族の希望を叶えるために、知っておかなければならない」「風習」は多い。

私の周りには民俗学者が多く、とても恵まれた環境であることに感謝している。ある日の現場のことだった。母親を亡くした妊婦が、泣きながら私の所へ来た。「『いせました』と聞くと、『みんなが、妊婦は死者に触れてはいけないと言います。私は最期にお母さんに触りたい。すがりた



い。」「集まっていた地域の人たちの方を見ると、高齢の男性が多く「妊婦はダメだ！ダメだ！」と、大騒ぎしていた。「なぜ、ダメなのでしょう。」「と伺うと、「妊婦が死者に触れると、お腹の子どもが連れて行かれる」と言い伝えられているからだ！」と言っていた。



近くに居た高齢の女性が言った。「近くに行くことは出来るよ。死者が鏡に映るように鏡を外側に向けて、胸に差し込み持たせよう。」「私が聞いた。」「勉強不足ではありません。それは、どのような意味を持ちますか？」「すると女性が言った。「死者の魂が、お腹に入らずにはじかれるそうだよ。」「なるほど。」「私は少し考えてから、妊婦の娘さんに声を掛けた。」「ちょっと待ってね。何とかするから。」「そして、外へ出て民俗学者に電話を掛けた。事情を話すと、その根拠を説明してくださった。

「昔はね、死者の体に触るのは男性の仕事だった。それは、死を迎えた魂は先祖の仲間入りをすると考えられた。死者の体は役割を終えた魂の抜け殻として考えられ、山の神に返す。昔の人は現代のように墓を持たず、山に運び弔った。山の神に返す、つまり神事であるから男性の役割だった。

昔は現代のような冷却法もないので、死体はすぐに腐敗してガスが発生した。日本の仏教絵画である『九相図(くそうず)』にもあるように、腐敗により身体はどんどん大きく膨らみ、体液も出血も止まらない。そ

うなれば重たかったから、女性には持てない。

昔の男女の役割も関係があった。男は外で仕事をして、女は家の食事や身の回り全般を担う役割だった。つまり、昔は死体に触れると腐敗臭が体に着いて数日取れない。だから、食事をつくってくれる女性にはさせなかったのだろうね。死体を取り扱う男たちは、身体を清めるということ、今でいう神社やお寺に籠り、現代の僧侶に近い存在の山伏などに護摩祈祷をしてもらって護摩で出る灰で腐敗臭を消し、腐敗した死体を見た記憶のトラウマを祈禱という形で押さえてもらって昇華する。昔はひとつひとつのことに意味があった。

それで本題だけれど、今でいう『感染症』を祟りの一つと考えていた。昔も感染により多くの人が命を落としてきたからだ。未知の存在の感染症は、それは恐ろしかったに違いない。死体は、土に埋めるまで、又は火葬されるまで、つまり生者の生活と切り離すまで死体は感染を保持していた。それは、昔も今も変わらない。つまり、先に説明した状態の遺体に触れた妊婦は、時に感染して赤ちゃんが流れてしまった。多くの人がそれを嘆き、いのちを守るための生きるための知恵である話が生まれる。それが、風習だ。現代よりはるかに衛生状態が悪い昔では、考えられることだった。民俗学者の話には、衛生面の根拠と赤ちゃんとお母体を守りたいという目的があった。

参加型納棺は、死後処置が必須である。ご遺体から出てくる出血や浸出液、死臭を火葬まで止め、遺族が遺体の変化で悲嘆を抱えないよう、お体を守るためセーフ

ティセットを使用する。界面活性剤やアルコール消毒も併用して行う。安置されている部屋の換気や室温の管理も出来ている。冷却管理をして腐敗を止める管理もできる。お別れが出来る環境ではある。けれど、昔の人が遺してくれた大切なことは、処置と冷却がないと感染のリスクが高いということだ。感染は、正しく恐れる。故人の娘である妊婦さんに、一連を説明した。「念のため、グローブとマスクはしましょうか？」「私が声を掛けて提案すると「はい！力強い返事と、良い笑顔だった。」「お母さんに会ったら、手を洗いましょうね。」「私が言うと、「はい！」と言って、お母さんに話しかけて泣いていた。

娘さんが言った。「私と同じ、悲しい思いをする人が居ないことを祈りたいです。」「私も同じ思いだったので、娘さんに提案した。」「お寺さんに、私と二人でお話ししてみようか？」

娘さんの菩提寺であるお寺の住職にこれまでのことを話した。住職が言ってくれた。「自分の孫を連れて行くおばあちゃんはいません。あなたのお母さんは、娘であるあなたと、孫を全力で守ってくれます。」「そう言って、葬儀の話でこの話をしてくれました。高齢者の皆さんには、お寺の住職から言ってもらおうのが嫌味が無くても良いことである。

故人であるお母さんと、妊婦である娘さんが大活躍した現場の話でした。

